

平家物語

自己評価・ワークシート



意識が変われば、行動は変わる
苦手意識の高い古文を克服していこう！

2年3組 No. 【 】

「平家物語」 自己評価シート

2年 組 No. 【 】

時	学習内容	挙手	評価	振り返り
1	・「平家物語」のあらましをつかむ		A・B・C	
2	・冒頭文を音読し、暗唱をめざす ・作品の根底に流れるものをつかむ		A・B・C	
3	・「扇の的」を仕掛けられた【与一・義経】の心情と人物像をつかむ		A・B・C	
4	・「扇の的」を射ようとする【与一】の心情をつかむ ・【与一】の心情を音読で表す。		A・B・C	

5	・【与一】の腕前に対して舞を舞う平家の老武者を射倒した行為に対しての自分の思いをまとめ、【与一・義経】の人物像をつかむ		A・B・C	
6	・【義経】の弓を命懸けで拾う行為の理由を考え、【義経】の行為の是非について自分の考えをまとめ、交流を通して新たな【義経】の人物像をつかむ		A・B・C	
7	・「扇の的・弓流し」からつかんだ【義経】のリーダー像を現代の学校生活と比べ、自分の理想のリーダー像をまとめる		A・B・C	

【平家物語】の学習を終えて

【 学習を終えて 】「枕草子」の学習時と比べて

- ・ 古文の学習について 克服した ・ まだ苦手意識がある
- ・ 現代仮名遣いについて 克服した ・ まだ苦手意識がある
- ・ 現代語訳について 克服した ・ まだ苦手意識がある
- ・ 古文の音読について 克服した ・ まだ苦手意識がある

課題

教科書やハンドブックを使って)

(に言葉を入れ、合戦の背景をつかもう。)

平家物語」は、約)

(年にわたる平家一門の興亡のありさまを語った

() (物語である。)

漢語を巧みに交えた文章には独特の調子とリズムがあり。)

(法師の語る

平曲(平家

)として広く民衆に親しまれた。

治承四年(一一八〇)、八月、源)

(は伊豆で旗揚げをし、やがて)

を本拠地に定めた。その年の九月には、同じ源氏一族である木曾)

(頼朝の

従兄弟】が信濃で兵を挙げた。)

(軍は、北陸の戦いで平家を打ち破り、寿永

二年(一一八三)七月、京へ攻め上る。平家の人々は、これを防ぎきれず、都を捨て、西

国へと落ちていった。翌年、ようやく勢力を盛り返して)

(に陣を構えた平家

だったが、頼朝の弟、)

(の奇襲(元暦元年、二月)に遭って、たちまち敗走し、

() (に退いた。元暦二年(一一八五)二月、)

(は、僅かな手勢と共に嵐

をついて海を渡り、平家の背後から突如として)

(へ攻め寄せた。慌てた平家

は舟を浮かべて海上に逃れ、陸の源氏と対峙した。

平家物語」は、)

(時代に成立した)

(物語。作者は、)

(法師

の著した)

() (に)

(という記述があるが、はっきりとしない。

物語には、人生をはかないものとする仏教の)

(を基調としながら、古代

から中世へと移り変わる社会の動きと、新時代の担い手となった)

(の姿が生

き生きと描かれている。

課題

冒頭部分の音読から暗唱を目指し、作品の根底に流れるものを捉えよう。

① 祇園精舎の鐘の聲ぎげんしんじやうじやう

② 諸行無常の響きありしよぎやうむじやう

③ 沙羅双樹の花の色しやらふじゆじゆ

④ 盛者必衰の理をあらはすじやうじやうひすい

⑤ おごれる人も久しからず

⑥ ただ春の夜の夢のいとしよ

⑦ たけき者もつひには滅びぬ

⑧ ひとへに風の前の塵に同じちり

現代語訳

① 祇園精舎の鐘の響きは、

菅・イノ下の須達長者が、釈迦のために建立した寺院

② 万物流転の常ならぬ世のさまを伝え、

【この世にあるすべてのものは、絶え間なく変化してとどまることがないこと】

③ 白々と散る沙羅双樹の花の姿は、

インド北部原産の常緑高木。釈迦がなくなったとき、そのゆかの四方に二本ずつ植えられていたこの木が、悲しみのために枯れ、白色に変わったこと。】

④ 栄える者の必ず滅びゆく道理を告げる。

⑤ 権におごる者の運命は、

⑥ 春の夜の夢のようにはかない。

⑦ 武に強い人の身の上もまた、

つひには消え失せること、

⑧ ひとえに風に吹き飛ぶ塵のようなものだ。

※ ⑤ 権…権力・権勢



課題 「冒頭部分から感じられることを読み取ろう。」

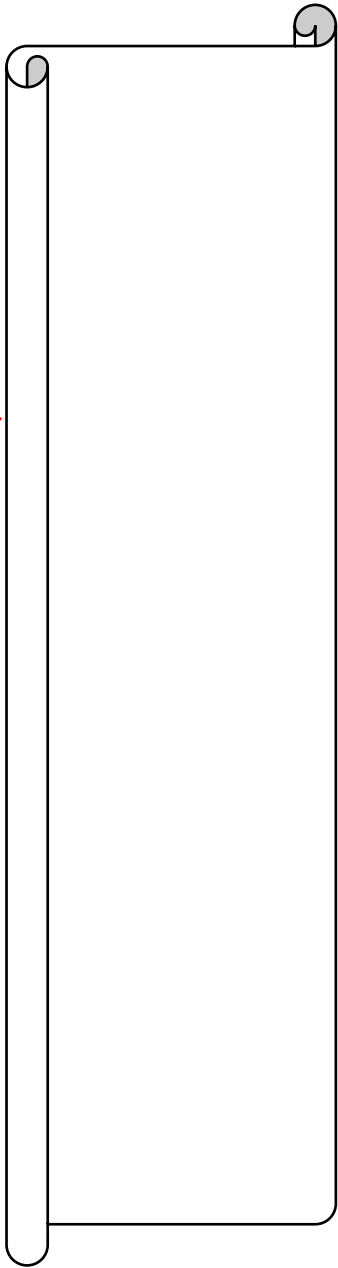
遠く異朝をたゞらひ入らば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の禄山、これらは皆、旧主先皇の政にも従はず、楽しみを極め、諫めをも思ひ入れず、天下の乱れんことを悟らざして、民間の愁々たることを知らざりしかば、久しからずして、口でこそ者どもなり。

近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおおれる心もたげきりても、皆とりどりにこそありしかども、間近くは六波羅の入道前の太政大臣平朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝うけたまは承るるぞ、心も詞も及ばれぬ。

遠く日本以外の例を尋ねてみると、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の禄山、これらは皆主君であった前の皇帝の政治にも倣おうとしないで、楽しみを極め、周りの諫言にも耳を貸さないうで、天下が乱れようとしてくることを悟ることなく、人々の憂慮を知らないまま続けたので、久しくなく短い間に滅びてしまった者どもである。

近く日本の例を調べると、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおおりの高ぶる気持ちも、勢いの盛んな勇猛さも、皆いらいこそそれぞれにもつていたが、短い間に滅びた者どもである。また、最近では六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申した人のおおりの高ぶる有様を伝え聞き申し上げると、全く想像することどもできず、言い表すことどもできないほどのものである。

祇園精舎の鐘の声」の部分と合わせて『平家物語』の根底に流れるものは何だろうか？



キーワード

課題 ()に当てはまる言葉を入れ、冒頭部分の暗唱につなげよう。

祇園	()	()	()
諸行	()	()	あり	
沙羅	()	()	()
盛者	()	()	をあらはす	
(()	も	()	
ただ	()	()	()
(()	も	ひ	ひ	
ひ	ひ	ひ	ひ	ひ	ひ	

祇園	()	()	()
諸行	()	()	あり	
沙羅	()	()	()
盛者	()	()	をあらはす	
(()	も	()	
ただ	()	()	()
(()	も	ひ	ひ	
ひ	ひ	ひ	ひ	ひ	ひ	

右側を隠して暗唱してみよう！

☆ 冒頭部分の暗唱 できた ・ できない

課題 「扇的的」の背景や与一・義経」の心情をつかみ、二人の武士に思いを寄せよう。

☆ 平氏は、なぜ、「」のような「」をしたのだろうか。

<p>【与一】</p> <p>なぜ、与一が選ばれたのか？」</p> <p>義経の命に対して与一は？」</p> <p>なぜ？ どんな思いに？」</p> <p>大物像</p>	<p>【義経】</p> <p>なぜ、無視しなかったのか？」</p> <p>大物像</p>
---	--

☆ 二人の武士に対して現代人のあなたはどのような「」を…？

<p>【与一】</p>	<p>【義経】</p>
-------------	-------------

☆ なぜ、与一に白羽の矢が立ったのか。

<p>判官、後藤兵衛実基を召して、 あれば、いかに」と宣へば、射よとこそ 候めれ。ただし大將軍、矢おもてにすすんで 傾城を御覽せば、手たれにねらうて射おとせ とのはかり事とおぼえ候。 さも候へ、扇をば射させらるべうや候らん と申す。 射つべきには、みかたに誰かある」と宣へば、 上手どもいくらも候なかに、下野国の住人、 那須太郎資高が子に与一宗高こそ小兵で候へど も手とさきで候へ。」</p>	<p>判官は、後藤兵衛実基を呼んで、 あればどういふことか」と言われると、射よ ということでございましょう。ただし、大將軍 が矢面に立って美人を見たら、弓の上手に狙つ て射落とせとの計略だと思われれます。そつで ありましても、扇を射させられるべきかと存 じます」と申す。 味方の中に誰か射る者がいるか」と言われる と、 弓の上手はいくらでもおりますが、中でも下 野国の住人、那須太郎資高の子で与一宗高こそ 小柄ではございますが、手練れでございませう。</p>
<p>証拠はいかに」と宣へば、 かけ鳥なむむとをめらがうて、三羽に三つは必ず 射おとす者で候。 それなら呼へ」と言ひおられたり。</p>	<p>証拠はどうだ」と言われると、 飛んでいる鳥を射落とすのを競つても三羽の うち二羽は射落とす者でございませう。 それなら呼へ」と言ひおられたり。</p>

☆ 義経に呼ばれた与一は…

判官の前に畏る。

「かに宗高、あの扇のまんなか射て、平家に
見物させよかし」。与一畏つて申しけるは、

射おほせ候はん事、不定に候。射損じ候ひ
なば、ながみかたの御きずにて候べし。
一定仕らんする仁に仰せ付けらるべうや
候らん」と申す。

判官大きに怒つて、鎌倉をたつて西国へおも
むかん殿原は、義経が命をそむくべからず。
すこしも子細を存ぜん人は、とうとう是よ
りかへらるべし」とぞ宣ひける。与一かさね
て辞せばあしかりなんとぞ思ひけん、はつ
れんは知り候はず、御定で候へば、仕つて「
そ見候はめ」とて、御まへを罷立ち、……

判官の前に畏まる。

さうだ宗高、あの扇の真ん中を射て、平家
に見物させてみよ。「与一が畏まって申した」
とは、

射れるかどうかはわかりません。射損じま
したならば、長く源氏の恥になります。確実
に射れる人に申しつけられるべきだと存じ
ます。と申す。

判官はたいそう怒つて、鎌倉を発つて西国へ
赴いた連中は、義経の命に背いてはならぬ。
少しでも文句を言う者は、さうさう「」から
帰られるべきだと、言われた。

与一は再度断るのは良くないだろうと思つ
たのか、外れるか外れないかはわかりませ
ん。お言葉でしるべいですので、いたしてみま
しう「」と申して御前を返さ、……

「義経の料簡が与一と義経の人情をいかに結びつけてみせよう。」

課題

扇的に向かう与一の心情を言葉から読み取ろう。

南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、

願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。

これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、

人に二度面を向かふたたびおもてぶべからず。

いま一度本国へ迎へんとおぼしめせば、この矢はつすさせたまふな。

と心のうちに祈念して、目を鼻開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よなっげになつたりける。

☆ 与一の心情を考えながら、音楽記号を使って読み方を工夫しよう。

<i>pp</i>	<i>p</i>	<i>mp</i>		<i>f</i>	<i>ff</i>
【とても弱く】	【弱く】	【やや弱く】		【強く】	【とても強く】
<i>mf</i>					
【やや強く】					
≡		≡			
【だんだん強く】		【だんだん弱く】			
速度 【速く・遅く】					

【与一はどのような思いだっただろうか？】

課題

なぜ、義経は自分の弓を命懸けで拾ったのだろうか？



☆ 義経の行為をどう思うか？

肯定・否定

--	--	--	--	--	--	--	--

☆ なぜ、「」のような「」が起こったのか？

『弓流し』から感じた新たな【義経】の人物像は…？

--

